3年越し 車いすから復活

道は 途絶えても 下

埼玉県に近い東京都立高島高のグラウンド。7月上旬、3年の橋本昇汰(18)は一塁の守備位置についていた。内野からの送球を次々と受ける。声を出し、仲間を鼓舞する。チームの主力選手だ。

□　□

2年ほど前までは、球拾いもできなかった。

2017年10月1日。

目覚めると、ぼんやりと病室の白い天井が見えた。枕元の医師や看護師から声をかけられた。記憶がなかった。起き上がろうとした瞬間、左半身が動かないことに気付いた。

軟式野球の有望選手で中学3年だった橋本はこの日、東京選抜の一員として新潟での試合に出ていた。「Kボール」という、軟式と硬式の中間のようなボールを使った大会だった。

「中学最後の打席だよ」。スタンドから母の恵(47)が声援を送った瞬間だった。左側頭部に死球を受け、意識を失った。

診断は脳振盪(しんとう)。1日安静にしていれば治ると言われた。だが、何日たっても左半身が動かなかった。握力はゼロ。検査を繰り返しても脳や神経に異常はなく、原因は分からなかった。新潟、そして転院した都内の病院での入院が続いた。

東北の甲子園常連校に野球留学する予定だった。幼い頃から夏の甲子園での優勝が夢だった。しかし今は、原因不明の半身不随。病室の布団の中で恐怖に震えた。

看護師が毎朝、「大丈夫？」と聞きに来る。大丈夫じゃねえよ――。叫びたい気持ちを抑え、「大丈夫です」と静かに答えた。見舞いも断り続けた。

年明けのある朝。いつもと同じ医師の検診で、左手を動かそうとした時、プルプルと震えながら動いた。

「体の左側の筋肉にエネルギーが注入されていくような感覚」だった。

ミーティングで背番号「3」を受け取った＝16日、東京都板橋区の都立高島高校、西畑志朗撮影

数日後の高校入試は、病院から車いすで向かった。左半身が少しずつ動くようになっていった。1週間後の合格発表は、杖をついて見に行った。退院。やがて杖も必要なくなった。

元通りのプレーはできないかもしれない。ただ、野球のそばにいたいと思い、硬式野球部に入部した。

久しぶりのグラウンドで、コロコロ転がる球に足がすくんだ。教室で、同級生に「貸して」と頼んだ消しゴムを投げられると全身が凍った。PTSD（心的外傷後ストレス障害）だった。

心のリハビリに取り組み、少しずつボールへの恐怖心を消していった。

1年が過ぎた。

□　□

「代打、いくぞ」

昨年5月3日、母校のグラウンドでの練習試合で、監督から告げられた。あの事故から580日ぶりの打席。突然の指名だった。

6―3の五回表、2死三塁。初球を振り抜いた。差し込まれたが、右前に落ち、適時打となった。硬球の衝撃が、両手に伝わった。「野球をやっている」。ベンチに戻り、泣いた。

今春、都大会での「背番号3」が与えられた。真っ先に母に伝えた。「おめでとう」。電話の向こうで、母は号泣していた。

その春季大会はコロナ禍で消えた。夏の選手権大会もなくなった。代わりに東京の独自大会が決まった。

開幕2日前の今月16日。学校の柔道場にチーム全員が集まった。背番号の発表。監督の島修司(52)から名前を呼ばれ、「3」と染められた布を再び受け取った。縦横二十数センチ。「ただの布かもしれない。でもずごく重い」

25日に東東京大会の1回戦に臨む。あの日以来、3年ぶりに公式戦の打席に入る。

（抜井規泰）

＝敬称略

ヘルメット着用義務 42回選手権大会から

高校野球では、1960年の第42回選手権大会から打者のヘルメット着用が義務づけられた。数年後には走者も着用が義務化された。95年には走者の安全を考え、これまでの片耳タイプから両耳にカバーのついたヘルメットとなった。衝撃吸収性など安全性が保証された「SGマーク」の製品が使用されているが、事故の根絶には至っていない。

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。